セッション名：「自由主義思想の射程」

世話人：森岡邦泰（大阪商業大学）

報告者；一ノ瀬佳也（立教大学）

松本哲人（徳島文理大学）

討論者；林直樹（尾道市立大学）

　本セッションは当日、中澤信彦会員（関西大学）を司会に迎え、以下のような内容で行われた。

一ノ瀬報告は「Ｆ．ハチスンにおける市民的関係の形成とその政治的課題」と題し、F.ハチスンの道徳哲学を取り上げ、その理論的な特徴を明らかにすることを行った。ハチスンの理論は、「慈愛」という普遍的な価値を提起する一方において、私的個人としての平等を主張していた。この点から、近代における市民的関係が形成される理論的な過程を辿っていった。

ハチスンの理論は、シャフツベリの「道徳感覚」を受け継いだものである。シャフツベリは自らの師であるロックの「生得観念への批判」に異論を投げかけ、真理が内在的に存在していることを論証しようとした。その際、ストア哲学の‘prolepses’の概念を用いて、経験に依らない直観的な知識の存在を見出すことになったのである。シャフツベリは、こうした全体論的な概念を提起しながらも、その「適用」においては誤りが生じることを指摘した。その中で、キリスト教文化に馴染まない世界各地の様々な風習やマナーは、「野蛮」として認められるようになっていった。シャフツベリにおいてはこのような形で、その概念の全体性を損なうことなく文化的な「多様性」を認めることが図られていたのである。

また、シャフツベリはロックと違い、「道徳」と「宗教」を区別することになる。ロックの理論においては、道徳の規律を守るために「宗教」が重要な役割を果たしていた。そのため、「寛容」についても無神論へと広げられることはなかった。これに対して、シャフツベリは先験的な知識を神の前に置いていた。そのため、無神論者が必ずしも不道徳となるわけではない。まさに、「徳」と「宗教」が区別されることになったのである。前者において皆が一致する統一的な基準が求められたのに対して、後者において自由な議論が開かれることになった。こうして、宗教上の熱狂と対抗しながら、道徳を論理的に捉えていくことが図られていた。

　ハチスンの理論は「道徳」をさらに論理的に捉え、それを民主化するものであった。ハチスンにおいては主観的な感覚に基礎が置かれるようになるため、シャフツベリが対抗した「快楽主義」を認めることになる。彼が提起した「内的感覚」を「美的感覚」と「道徳感覚」に分け、後者に「他者の善」を見出すことになる。さらに、主観に依拠する「名誉感覚」から「公共感覚」を区別し、「普遍的で温和な慈愛」を導きだした。このようにして、「個人」と「全体」が理論的に区別されることになった。

　ハチスンは「権利」の議論においても、他人に譲渡できない「完全な権利」を個々人に保障することを企てていた。また、「国家」の役割も限定され、その権力を法的に規制していくことが図られていくことになる。さらに、私的な領域である「家庭」の中の権力構造が暴き出され、夫婦、親子、召使の間の平等が問われていくことになった。このようにして、「私的な主体」としての個人の平等が提起されるようになったのである。そうした私人も「道徳能力」を行使することによって、「公的な主体」にもなることができると論じられた。これは、既存の政治制度から排除された人々の存在を意識させ、彼らにも「政治的な空間」を開いていくことをもたらした。このようにして、ハチスンにおいては限界を持ちながらも、個人の自由が拡げられていったのである。

　コメンテーターからは、ハチスンの「慈愛」の徳とルソーの「一般意志」との関係が問われた。これに対して、ハチスンにおいては、ルソーのような公共体を形成する積極性が見出されないと回答した。次に、会場から引用などに2次文献の利用が多いということが指摘され、もっと１次資料を使うべきであると問われた。資料の使い方については、今後において改善していくことを回答した。さらに、「ハチスンの理論がなぜこれまで取り上げられてこなかったのか」についての理屈も説明すべきではないかと問われた。この点は本発表においてはまったく触れられておらず、先行研究とのつながりを考える重要な指摘となった。最後に、ハチスンの「慈愛」の徳が、カントの「定言命法」にどのように影響を与えたのかについて問われた。この点においては、スコットランド啓蒙からドイツ観念論への影響を辿ることが必要となるため、今後の研究課題として残されることになった。

次に松本報告では「イングランド啓蒙における宗教・経済・政治――ジョサイア・タッカーを中心に――」と題し、ジョサイア・タッカー(Josiah Tucker, 1713-1799)を宗教、経済、政治の観点から統一的に理解し、彼が保守的自由主義者としての側面を――バークほどに前面に押し出していないとしても――保持していたことを明らかにすることを目的とした。これまで日本においては、政治的保守主義（＝国制の漸進的変化）と経済的自由主義（＝機械の使用の正当性や自由貿易）との「ユニックな結合」という小林昇による理解が一般的であるが、このような理解は正しいのかというのが出発点である。

　今回、そのような小林の理解とは異なる視点からタッカーを見てみようというのが一つの課題である。それはイングランド啓蒙という視点である。啓蒙とは、自由な知識の追求が知識の増加をもたらし、最終的には生活水準の向上を引き起こす思想である。その中でもとりわけイングランドにおける啓蒙において、宗教的（キリスト教的）要素が重要視され、宗教と科学の結合が要請されたのであった。Brookeが論じるように、「啓蒙時代の特徴を科学的唯物論と宗教的価値観の対立図式とする構図は、あまり上手な素描ではないのである。フランスで真実らしかったことが必ずしもブリテンには当てはまらない」のである。

　そこで本報告では、タッカーにおける宗教と経済の関係を見直した。タッカーにおいては、経済の原理と宗教の原理は一致するものである。また、「勤勉と労働Industry and Labour」というキリスト教的徳をすべての人々が得ることが可能であるので、キリスト教が経済活動を促進し、富を増加させる手段となるとタッカーは考えていたのであった。その具体的な例示として彼の分業論に着目した。さらに、タッカーは、慈愛心を強調しながらも自己愛の存在を認め、その自己愛を管理するために政府の役割を強調した。

また、彼の政府論が、ロック批判に立脚し、伝統を重視していたと論じられていたことを強調した。歴史的経緯や過去を一切消去したロックやロック主義者たちの「白紙状態」の想定し、伝統や歴史的経緯を放棄し、新たな政府の設立を求めるロックやプリーストリーに対し、タッカーは、伝統的に受け継がれてきた宗教や慣習といったものを含む人間の生まれながらの本能から引き出される伝統を重要視し、新たな政府の設立をタッカーは拒絶した。そのような対比から伝統を尊重したタッカーを保守的自由主義者と規定した。

保守的自由主義とは、急激な社会的変化を嫌悪し、その国制の漸進的な改革を要求した。懐古主義でもなく急激な社会変革でもない穏健な自由主義的な傾向を持つ思想である。その思想的中核には自生的秩序論がある。タッカーにおいて分業は自生的秩序の典型例として出てくる。この点において、タッカーとハイエクは非常に大きな共通点を持つことを明らかにした。

タッカーは経済論において宗教との結びつきを重要視し、特化と分業の必要性、個人の自由な意思を挫かないような政府の賢明な政策立案を求め、「法の下における自由」を容認するように論じ、アメリカ植民地の反乱を「法の下における自由」からの逸脱と見なした。タッカーは抵抗権の行使という伝統や歴史の廃棄ではなく、伝統や歴史に則った形での漸進的な改良を求めていたが、それが現実的に困難であると考え、アメリカ植民地の分離独立を容認したのであった。

　本報告の結論は以下の通りである。小林は政治的保守主義と経済的自由主義の「ユニックな結合(小林 1977. 227)」をタッカーに見出した。小林はあくまでも社会経済システムの分析視座からの考察を通してこのような結論を提示した。しかしながら、タッカーの経済論や政治論はあくまでも彼の宗教的信念をその背後に持ち合わせていた。彼の国教会に対する態度や宗教的信念に着目すれば、彼の思想的一貫性は明らかであるだろう。タッカー自身、何らの矛盾も抱えていないし、「ユニックな結合」であるとも考えなかったであろう。

　本報告に対して、以下のような質問があった。18世紀後期イングランドにおける国教徒の思想的な比較を行うことによってタッカーの思想の特徴をより明らかに当時の文脈に即して見ることが可能ではないか。また、小林のタッカー理解（政治的保守主義と経済的自由主義の「ユニックな結合」と小林がいったときの）の妥当性を再検討する必要があるのではないか、などであった。

　一ノ瀬報告と松本報告のそれぞれに対し，討論者の林は次のようにコメントした。

一ノ瀬報告は，ハチスンが自己愛由来の幸福と慈愛由来のそれを区別し，後者を前者の上位に据えたと説くが，これはルソーにおける全体意志と一般意志の区別に類するものではないか。また松本報告は，伝統を「保存するために改革する」保守的自由主義の信条に立ったタッカー像を描き，この国教会牧師における政治的保守主義と経済的自由主義の結合は不自然ではないとして，彼を「ユニック」と評した小林昇を批判するが，独自性の存否は同時代の他の国教会構成員と比較して初めて明らかになることではないか。

これらをめぐっては，フロアも交えた討論の中で有益な示唆が得られた。ハチスンが伝統的キリスト教倫理を強く前提しているのに比べ，ルソーにはそれが弱いことが，両者を隔てる要因のひとつとなっていること，また小林昇のタッカー評はスミスを念頭に置いた比較の言辞である以上，文脈の相違をまず踏まえるべきこと，などである。